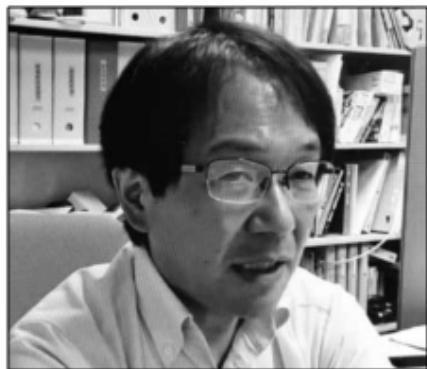


ラビダスなど半導体工場も使用 PFAS汚染に情報公開が急務

■札幌の学習会で環境衛生学者の原田浩二さんが内外の状況を解説

9月16日、「半導体とPFAS（有機フッ素化合物）のリスクについて」

をテーマにした学習会が札幌市内で開かれた。NPO法人さっぽろ自由学校「遊」が続ける半導体講座の一環で、会場とオンライン合わせて40人ほどが参加。日本のPFAS研究では第一人者の原田浩二さん（京都府立大学教授・環境衛生学）を講師に迎え、全国に広がるPFAS汚染の実態をはじめ、半導体工場との関係



PFAS汚染の実態などを紹介した京都府立大の原田さん

などを学んだ。

原田さんは2002年に京都大学で小泉昭夫教授（現・名誉教授）の調査チームの一員としてPFAS汚染の問題に取り組み始め、近年は国内の市民団体などと協力して調査研究に携わる。著書『水が危ない！ 消えない化学物質「PFAS」から生命を守る方法』（河出書房新社・24年）など多数。ラビダスの稼働を前に昨年夏に市民有志で立ち上げた「北海道PFAS調査隊」が千歳川や美々川などで採水したサンプルの分析にも協力している。

コーティング剤や泡消火剤、半導体、殺虫剤、フッ素樹脂製造時の加工補助剤などに広く使われるPFASは1940年代に米国の化学企業が開発。少なくとも4千7百種類以上のPFASが存在するが、長く環境に残留する性質があり、各地で地下水や土壌の汚染が続く健康への影



「ラビダス」稼働を前に千歳川から採水する「北海道PFAS調査隊」メンバー（昨年8月）

響が問題視されてきた。国内ではPFOSとPFOA、PFHxSの製造、使用、輸入が原則禁止されただけで、他の物質は依然使われている。

原田さんは、国内の河川水のPFAS分布や地下水と水道水の汚染状況、京都府住民の血液のPFOA濃度などを紹介。健康影響について、「ヒトでの調査で脂質異常症や甲状腺疾患、ワクチン接種後の抗体価の変化などをもたらす可能性があると分かっています。急性の影響より、徐々に蓄積し長期的な影響を与え、PFAS濃度が高いとその割合が上がる」と指摘した。

ラビダスやTSMCなど半導体の分野では、「かつてPFOSを使用した、新規工場では短鎖PFASが利用される。これらは、かつてのPFOSよりは毒性が低い」と述べた上で、いま半導体工場で使われそうな物質として、PFBsとPFPeS、PFBAの3つを挙げた。また、熊本県のTSMCでは今年、工場の処理水が放出される河川でPFAS濃度が上昇した——との紹介も。

世界の動向にも言及した原田さんは、次のように講演をまとめた。

＊PFAS使用の履歴と汚染調査がリンクする必要があり、汚染場所の近隣での土壌調査も必要

＊地下水汚染は広がりやすく、中長期的な動きを把握することが必要

＊水道水の目標値は当面50ナノグラム／ℓが続く見込みだが、将来引き下げられる可能性がある。対象PFASの追加を考えるべきだ

参加者からはPFASによる発癌性や半導体工場との関係などの質問や、道などへの要請の必要性を説く意見も。原田さんは「（企業や行政に）情報公開や市民との対話、説明責任を求めることが大切」と助言した。（ルポライター・滝川康治）